

あとがき

私にとってはかけがえのない母語・日本語。その日本語のシステムが私の中で生きている。いとおしささえ感じるこの内なるシステムは、いったいどのようなしくみをもっているのだろうか。そのしくみをできるだけ明らかにしてみたい。幸い、そのための一つの方法が与えられている。

生きて働いている日本語のシステムのしくみを明らかにしたい、という強い衝動に駆られてここまでやってきた。研究というものは初めから成功すると分かっているものではない。この研究を始めた大学院生のときにはこのようなところまで来られるかどうか心配だった。もう30年以上も前のことである。幸いここまで来たが、この先どこまで行けるものなのかは分からない。しかし、ここまで来られたからには、まだもう少しは進んで行けそうな気もある。それに、まだまだ取り組まねばならない課題がいくつもあるのだから、ここで立ち止まっているわけにはいかない。

これから取り組みたい主な課題は次のようなものである。

格分類の原理

実体構成の原理

実体分類の原理

ノつなぎの原則

条件表現の原則

構造連続描写(文と文の接続)の原則

また、「各形態・形態素の統一的な詳しい記述」という仕事もある。この記述は辞書における記述よりは、はるかに、はるかに詳しいものになるだろう。地球上のあらゆる生物はDNAという情報の糸で記述し分けることができる。形態・形態素にもDNAを設定しよう。そしてあらゆる形態・形態素

を情報の糸で記述し分けよう。「分ける」という作業が理解をもたらすと考えられるのである。

一人の力には限界がある。これらの課題が目の前にありながら、力およばぬ結果に至るであろうことは予想に難くない。それは承知の上で、できるだけのことはやっていきたいと思う。

本書を読まれた方のアドバイスを受けることができれば幸いである。

さて、本書の次の部分はこれまで『杏林大学外国語学部紀要』(以下『紀要』)において発表してきた論考がもとになっている。ただし、若干修正し、大幅に書き加えてある個所も多い。

第Ⅰ部 「日本語構造伝達文法・序論」『紀要』第7号 1995

第Ⅱ部 「日本語構造伝達文法(2)」『紀要』第8号 1996

第Ⅲ部 「日本語構造伝達文法・序論」『紀要』第7号 1995

第Ⅳ部、第Ⅴ部 「日本語構造伝達文法(4)－テンスは流れ、アスペクト
は舟－」『紀要』第10号 1998

第Ⅶ部 「日本語構造伝達文法(3)－複主体－」『紀要』第9号 1997

第Ⅷ部 「日本語構造伝達文法(5)－時空否定／テンス・アスペクト2桁数
表示－」『紀要』第11号 1999 (在外研修時の研究)

ここに掲げてない部分、つまり第VI部、第IX部～第XIII部は、1998年度の在外研修(韓国・高麗大学)での研究をまとめたものである。

なお、第40章(第XIII部)は「日本語構造伝達文法の視点から」と題して『学問のすすめ』(杏林J E C特別号 1996)に載せたものがもとになっている。

本書を書くにあたって図形を描く必要があったが、図形プロセッサはジャストシステム社の「花子」を使用した。